

# デジタル・シティズンシップ教育の実践

## ― 日常の教育活動における「ICT の善き使い手」の育成 ―

教育相談センター  
倉田 真衣

教育相談センターでは、令和 4 年度からデジタル・シティズンシップ教育の実践研究に取り組んできた。4 年目となる今年度は、これまでの 3 年間の成果と課題を踏まえ、新たな研究協力校において、日常の教育活動の中にデジタル・シティズンシップ教育の視点を組み込む方法を探ることを研究の方向性として位置付けた。実践研究を通して、「ICT の善き使い手」に必要な資質・能力を育成するポイントや手立てを全校で共通理解することで、その後の日常の教育活動における継続的な実践に繋がることが示唆された。

**<キーワード> デジタル・シティズンシップ教育 ICT の善き使い手 日常の教育活動**

### I はじめに

現代の子どもたちは、テレビやパソコン、スマートフォン、タブレットなど、多様なメディア機器に囲まれて生活している。学校でも 1 人 1 台端末が整備され、インターネットを活用した学習や発信活動が日常化している。こうした環境の中で、リスクを理解するだけでなく、メディアを上手に使いこなし、生活や学びに生かす力が求められている。

本センターでは、すべての子どもたちがデジタル社会を幸福に生きられるよう支援することを目的に、県内の小学校においてデジタル・シティズンシップ教育の実践研究に取り組んできた。令和 4 年度から 6 年度の 3 年間は、坂井市立春江小学校・勝山市立鹿谷小学校の 2 校を研究協力校とし、国際大学グローバル・コミュニケーション・センターの豊福晋平准教授から指導・助言を得ながら実践研究を進めた。

令和 4 年度の授業実践は、高学年を対象に 4 つの領域で行った。実践後、児童が課題を自分事として捉え、メディアをより良く活用しようとする姿が見られたり、多面的に児童理解を深める教員の姿が見られたりした。一方で、学んだ知識やスキルを生かす場の設定が難しく、定着という点で課題が残った。そこで、令和 5 年度は、デジタル・シティズンシップ教育での学びを生かす手立てとして、総合的な学習の時間に関連づけた実践と、低・中・高学年で系統立てた授業実践を行った。実際に発信する活動に学びを組み込んだことや、発達段階に応じたアプローチにより、児童の主体性をより引き出すことができた。一方で、デジタル化がもたらす課題は多様化・複雑化しているため、「ICT の善き使い手」に必要な知識やスキルを獲得するには、そうした現状に応じながら授業を実践する必要があることが明らかになった。令和 6 年度は、より現状の課題に対応できるよう授業を実践した。デジタル社会を生きる子どもたちに今後必要な力が何かを意識して実践内容を決定したことで、児童自身がその必要性を実感し、日常のメディア利用の場面において、授業で獲得した知識やスキルを生かす姿が見られた。内容がより実践的・具体的になった一方で、継続的に取り組むためには、指導者が見通しをもって実践できるような支援体制や、指導のポイントを共有する仕組みづくりが必要であることが課題として残った。3 年間の研究の成果と課題を踏まえ、令和 7 年度は新たな研究協力校で、デジタル・シティズンシップ教育を学校の日常の教育活動に組み込み、子どもたちを「ICT の善き使い手」として継続して育成する具体的な方法の探求を実践の方向性として位置付けた。

\* 令和 4 年度～ 6 年度の研究の詳細については、本研究所「紀要」（第 128 号 2023.3、第 129 号 2024.3、第 130 号 2025.3）に掲載

### II 実践の概要

#### 1 研究協力校について

上志比小学校は、全校児童数約 100 名の小規模校で、デジタル・シティズンシップ教育を中心とした情報活用能力の育成をスクールプランに掲げている。令和 6 年度から全校でデジタル・シティズンシップ教育に取り組んでおり、授業や委員会活動ではタブレット端末を効果的に活用し、オンラインでのやり取りにおいても相手を思いやる姿勢を大切にしている。また、児童同士や家庭で端末の使い方について対話する機会を定期的に設けるなど、学校全体で児童の端末利用を支える取組みがある。

令和 6 年度は、本センターの訪問型研修を活用して教員対象の研修や授業実践を行い、デジタル・シティズンシップ教育の理念を全校で共有した。また、担当教員が活動案を提案し、各担任が自クラスに

合うようにアレンジして授業を実践してきたが、児童に正しい知識やスキルを定着させるためには、取り組みを継続させる必要があると考えていた。

今年度は、本センターの所員と昨年度担当教員だった教務主任で打合せを適宜行いながら実践を重ねた。教務主任が、今年度コーディネーター役を担うことになった。

年度当初の打合せで、教務主任から今年度のデジタル・シティズンシップ教育の年間計画が提示された。春と秋に全校でデジタル・シティズンシップ教育の授業実践を行うこと、春は昨年度の流れを引き継いで各担任が実践し、秋は各担任が新たな活動案を用意して授業を実践することを確認した。そこで、所員から、授業を実践する全教員が、児童の実態に合わせて領域を選択し、どの資質をどのように育成するかを具体的にイメージできるように、実際の授業づくりを通して支援することを提案した。そして、6月に高学年（4～6年生）、9月に低学年（1～3年生）で授業を実践することとなった。実践する領域は、教務主任と相談し、各学年のタブレット活用の実態や今後の教育活動で予定されている活用に合わせて、2つの領域を選択した（図1）。また、昨年度紹介した「GIGA びらき」の実践を改めて提案したところ、新入生にタブレット端末を配付するタイミングで実践することとなった。

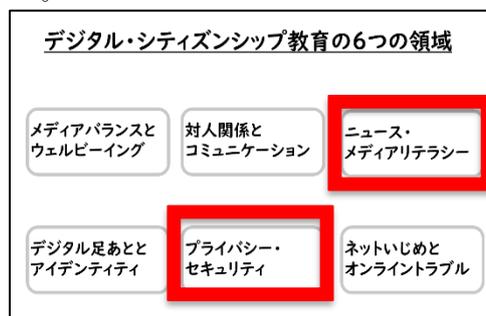


図1 選択した領域

以下に、今年度のデジタル・シティズンシップ教育の年間計画を示す。

〈令和7年度 デジタル・シティズンシップ教育の年間計画〉	
4月	学校公開（全校でデジタル・シティズンシップ教育の授業実践）
5月	「GIGA びらき」（1年生）
6月	高学年（4～6年生）の授業実践 ・ニュース・メディアリテラシーの領域「情報の信頼性を確かめよう」
8月	現職教育（6月の実践報告と指導案検討）
9月	低学年（1～3年生）の授業実践 ・プライバシー・セキュリティの領域「みんなにやさしい写真を撮れるようになろう」
11月	学校公開（全校でデジタル・シティズンシップ教育の授業実践）

## 2 今年度の実践内容

### (1) 春の学校公開（4月）

4月の学校公開では、前年度に実施したデジタル・シティズンシップ教育を踏まえて教務主任が活動案を用意し、各担任が自クラスの実態に合わせて実践した。所員が当日の授業を参観し、実践の構成や扱われている視点を把握することができた。参観を通して得られた情報を基に、デジタル・シティズンシップ教育を学校の日常の教育活動に組み込むために必要な支援を検討し、以下に述べる実践へと繋がった。

### (2) 「GIGA びらき」の実践

昨年度、上志比小学校で実施した訪問型研修において「GIGA びらき」の目的や活動例を紹介した。年度初めに改めて実施を提案したところ、児童が初めてタブレット端末に触れる1年生の時期に実施することが望ましいという学校側の意向から、1年生対象の「タブレット貸与式」として取り組むこととなった。

事前打合せでは、昨年度の活動案をもとに上志比小学校の実施方法を検討した。実際に他校で使用したワークシートや提示資料を示すことで、活動の流れや目的を具体的に共有することができた。その後、教務主任が校内で検討を進め、端末との出会いを儀式として大切にしたいという意図から、「校長が児童一人ひとりに手渡す」という方法が学校から提案された。

実践では、1年生の教室と校長室をオンライン会議システムでつなぎ、校長と児童が対話する場面を設定した。やりとりの終盤には、児童が校長に「教室に来てください。」と伝え、校長がそれに応じるという場面を設定した。担任が「遠くにいる人とも話ができるね。」と声かけをしたことで、児童はオンラインでのコミュニケーションの利便性を実感し、感嘆の声をあげていた。その後、校長から端末が配付され、カメラ機能を使った写真撮影の活動に取り組んだ。学校生活で今後多く用いる機能を体験したことにより、児童はタブレットをどのように学習に活かすかを具体的にイメージできた様子であった。

事後検討会では、学習に直結する機能を体験させたことが、児童の主体的な活用イメージの形成につながったことを確認した。また事後の児童の様子として、「互いに声を掛け合って大切に持ち運ぶ姿」や「学びに生かそうとする前向きな姿勢」が見られたという報告を得た。

\*昨年度の「GIGA びらき」の詳細は、本研究所「紀要」（第 130 号 2025. 3）に掲載

(3) 高学年における授業実践

高学年では、「ニュース・メディアリテラシー」の領域を扱い、単元名「情報の信頼性を確かめよう」を実施した（図 2）。本実践は、インターネット上から必要な情報を選び、選んだ情報の信頼性を自分なりに考えることができるようにすることをねらいとしている。実施する単元や教材については、日常の学習でインターネット情報を扱う機会が多いという高学年の実態を聞き取り、所員が提案した。



図 2 高学年の授業

4～6年生の担任と教務主任、所員で事前打合せを行い、「複数の信頼できる情報源から情報を探して評価する」「情報の出どころや内容を確認、正しい情報かどうかを判断する」という行動目標を共有した。

5・6年生で担任と所員による提案授業を行い、4年担任と教務主任が参観した。授業では、教師が提示したインターネット情報を素直に信じる児童の姿が見られ、「情報の信頼性を見極める力が必要である」ことが教員間で共通の気付きとなった。これを受けて、4年生の授業では、より直感的に判断しやすい広告の写真を題材とするなど、学年に応じて指導内容を調整した。

事後検討会では、「国語や社会の学習で図表やポスターを扱う際にも、信頼性を確かめる視点が必要である」という気付きが生まれ、日常の教育活動に生かす具体的な活用場面を確認した。また、担任から「11月の学習発表の場面で、情報を発信する際にどのようなことに気を付けるべきかを扱いたい。」という発言もあり、6月の学びを11月の実践につなげる方向性が共有された。

(4) 現職教育

8月の現職教育では、前半に実践報告を行い、後半は指導案検討の時間とした。

まず、高学年での授業実践報告を行い、単元のねらいや育成したい資質を共有した。その後、それぞれの学年の授業で活用したインターネット情報を用いて演習を行い、情報の信頼性をどのように判断するかを体験的に考える機会とした。授業での児童の反応や担任の気付きも共有することで、情報活用場面において育てたい視点について、学校全体で共通認識をもつことができた。

演習後は低学年部会と高学年部会に分かれて、今後のデジタル・シティズンシップ教育実践に向けて指導案検討を行った。所員が低学年部会、教務主任が高学年部会に入って検討し、それぞれ話し合ったことを現職教育後に共有した。

演習と指導案検討を通して、教員が学年に応じた実践のイメージをもち、学校全体でデジタル・シティズンシップ教育の視点に基づく授業準備を具体的に進めることができた。また、3年担任からは「3年生で今後インターネットを活用した調べ学習を始めることを見据え、高学年で行った授業を自クラスでも実践したい。」という申し出があり、11月の実践に繋がった。

(5) 低学年における授業実践

低学年では、タブレットのカメラ利用が多い実態を踏まえ、「プライバシー・セキュリティ」の領域より「みんなにやさしい写真を撮れるようになるう」の実施を提案した。授業では、人に見られる場所に掲示する写真を撮るときのポイントについて、実際に撮影する体験を通して理解を深めることをねらいとした。

事前打合せは、1～3年生の担任と特別支援学級の各担任、教務主任、所員で行い、「他の人の気持ちに気を配る」「自分や他者への影響を踏まえて行動を判断する」という本実践の行動目標を共有した。

2・3年生で担任と所員が提案授業を行い、1年担任が参観した。児童が「写込み」を技術的な失敗として捉える様子が見られたため、育てたい

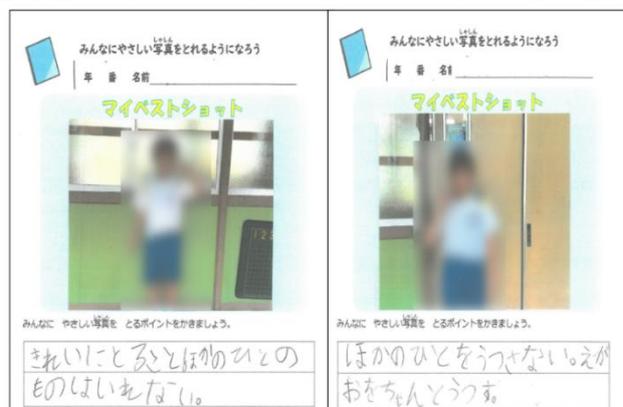


図 3 授業ワークシート（1年生）

資質に沿った声かけが必要であることを共有した。1年担任はそれを踏まえて自クラスで実践し、授業後には「授業の流れや声かけがイメージしやすくなった」という感想が得られた。1年生の授業ワークシートには、「他の人や他の人の持ち物が写り込まないようにする」といったトラブルを避けるための配慮に加えて、「相手をきれいに撮る」や「笑顔を写す」といった記述があったことから、児童が、他者への配慮や前向きな表現を意識して行動を選択できたことがうかがえた（図3）。

事後検討会では、写真・動画を扱う日常の場面で、今回の学びを児童が生かせるように継続して声をかけていくことを確認した。併せて、11月の実践内容についても協議したが、「著作権の発生する作品の使用が容易にできる今、他人の作った作品への向き合い方を低学年のうちから考えさせたい」という教員の思いから、1・2年生では著作権を扱うこととなった。

その後、具体的な構成については、低学年でも扱いやすい教材を選定し、教務主任を通して担任に紹介したり、教材の扱い方について必要に応じて助言を行ったりしながら、実践の方向性が定まるよう継続して働きかけた。また、著作権の学習を日常の教育活動と関連付けて理解できるようにするため、教科との連携も提案した。これを受けて、教務主任が6年生の音楽科で「著作権」を扱った授業を行い、その内容を低学年部会に共有したことで、11月の実践の具体化が進むことに繋がった。

#### (6) 秋の学校公開(11月)

##### ① 事前検討会

8月の現職教育で指導案を検討した後、修正点の反映や最終確認のための全体での検討会を10月に実施した（図4）。

6月と9月の授業実践は、所員が提案した指導案をもとに各部会で検討し、提案授業を参観したうえで、担任が自クラスの実態に応じてアレンジする形で実践が進んだ。いずれも、提案授業を起点とした段階的な支援であり、授業の具体的なイメージを共有したうえで各担任が授業を組み立てる流れであった。

一方、11月に向けては、6月・9月の実践で授業イメージと観点が共有できたため、担任主導で授業を構想していく形へと支援の在り方を転換した。教材や資料を紹介し、教務主任と連携しながら必要に応じて助言を行ったが、授業の中心的な設計は各担任が主体となって進めた。高学年では、6月の学びの視点を踏まえつつ、学年の学習内容に応じて授業構成が作られていった。低学年では、著作権を扱う意義や扱い方については教務主任を通じた相談の積み重ねや各担任の検討により内容が固まっていき、学年の発達段階に合わせた形に調整された。



図4 事前検討会

##### ② 当日の様子

学校公開当日は、保護者も巻き込んで授業を実施し、懇談会でもデジタル・シティズンシップ教育を主要な話題としていた。4年生では、思いやりのある発信の具体的な行動を保護者と一緒に考える場面が設定されていた（図5）。どの学年の授業ワークシートにも保護者のコメント欄が設けられており、学校と家庭で学びを共有していた。



図5 4年生の実践

### 3 結果及び考察

本実践では、提案授業（6月・9月）後に実践した教員へのインタビュー（4名）および事後アンケート（9名）を通して、「ICTの善き使い手」に必要な資質・能力を育成するポイントや手立てが全校でどのように共通理解されたかを考察した。

#### (1) 教員対象のインタビュー（12月実施）の結果

6月・9月の提案授業を参観後に自クラスで実施した担任と教務主任を対象に、インタビューを行った。枠内に、主な回答を取り上げる。（回答数4）

##### ① 授業を実践してよかったことは、どのようなことか。

- ・デジタル・シティズンシップ教育は、一度の授業だけでなく、繰り返し子どもたちに働きかけることが大切だと感じた。
- ・教科で取り入れられそうなことが出てきたときには、ポイントを絞って伝えることができた。
- ・学びを生かす場を自分で見つけ、実践できるようになった。

(2) 教員対象のアンケート（1月実施）の結果

デジタル・シティズンシップ教育の授業実践を行った全ての教員を対象に、事後アンケートを行った。（回答数9）

① 実践で得た学びを、その後の教育活動にどのように取り入れたか。（複数回答）

- ア 写真や動画を撮る場面で、他の人の気持ちを尊重するよう声かけした（6人）
- イ 写真や動画を発信（掲示）する場面で、他者への影響を考えるよう声かけした（7人）
- ウ インターネット情報を活用する場面で、信頼できるものかどうかを確かめるよう声かけした（5人）
- エ 人の作った作品に対する振る舞い方を考える場面を設定した（4人）
- オ 教員同士で実践を振り返ったり、新たな実践に向けたアイデアを共有したりした（6人）
- カ デジタル・シティズンシップ教育単独の授業ではなく、教科の授業や学校行事などに関連付けて実践した（6人）
- キ 取り入れなかった（1人）

② ①の具体的な実践内容

- ア・校外学習や生活科で動画を作成した際に、周囲に気を付けて撮影するよう声をかけたところ、自分自身で考えて撮影する児童の姿が見られた。
  - ・町たんけん写真を撮る際に、一般の方への配慮ができるよう児童に声をかけた。
  - ・生徒指導の場面で、学びを生かした声をかけることができた。
- イ・児童がスライドを作成して発表する学習で、発表相手を意識して情報を選択するよう声をかけた。
- ウ・委員会活動や音楽・図工で調べ学習をする際に、信頼できる情報かどうかを確かめるよう児童に声をかけた。
- エ・児童の作成した資料を見て、他人の作品に対する配慮があるかどうかを児童と一緒に確認した。
  - ・総合的な学習での学びを下級生に発表する際、資料として使った写真の活用について児童と話し合った。
  - ・スライド作成時にインターネット画像を使用することが予想されたため、事前に著作権について振り返る場面を作った。
- オ・放課後の時間に、デジタル・シティズンシップ教育の各教科での取扱いについて話した。
- カ・6年生の音楽の授業で、著作権の学習をした。
  - ・国語科のグラフや表を用いて説明文を書く単元で、古い資料を用いた児童がいたため、より信頼性のある最新のデータがないか探してみようと声をかけた。

(3) 考察

事後のインタビューやアンケートで得た回答から、日常の教育活動の中で、デジタル・シティズンシップ教育で育てたい資質・能力を育成する場面が確認された。これらの場面がどのように生じ、学校全体へと広がっていったのかについて、以下の2点から考察する。

① 日常の教育活動への展開

インタビューでは、「繰り返し扱う必要性を感じた」「自分で生かす場面を見つけられた」という回答を得た。この結果から、6月・9月の実践で扱った視点が、一時的な取組みにとどまらず、「日常でも活用できる指導観」として位置付いたことがうかがえる。また、アンケートからは、撮影場面での声かけ（6人）、発信場面での声かけ（7人）、情報の信頼性を確かめる指導（5人）、作品への振舞いを扱う場面（4人）など、日常の教育活動と結びつけた具体的な指導が複数挙げられた。これらはいずれも、タブレット端末を活用する日常的な学習活動の中で頻繁に生じており、デジタル・シティズンシップ教育で育てたい資質・能力が求められる場面でもある。6月・9月の実践において、これらの日常場面と結びつく視点や声かけの例を示し、実践へ移しやすい形で共有したことが、教員の取組みを後押しし、実践の広がりにつながったと考えられる。

② 実践の広がりを支えたコーディネーターの役割

アンケートでは、「教員同士で実践を振り返ったり、アイデアを共有したりした」（6人）、「教科の授業や学校行事と関連付けて実践した」（6人）といった回答が見られた。これは、各学年の実践が

校内で共有されながら学年や教科へ広がっていったことを示す。

こうした広がり背景には、コーディネーターを担った教務主任の働きが大きかったと考えられる。教務主任は、低学年・高学年どちらの打合せにも参加し、授業で得られた視点や学びを整理して他学年へ橋渡しした。また、自らが担当する音楽科の授業において、著作権に関する内容を取り上げ、「人の作った作品を大切に作る」という視点を児童とともに考える実践を行った。この実践は、デジタル・シティズンシップの視点が教科の学習の中でも扱えることを校内に具体的に示すものである。

インタビューで得られた「教科で取り入れられそうなことが出てきたときは、ポイントを絞って伝えることができた」「学びを生かす場を自分で見つけ、実践できるようになった」という教員の声は、こうしたコーディネーターの働きにより、学校全体で指導のポイントが共有されたことを示している。

### Ⅲ おわりに

デジタル・シティズンシップ教育の3年間の特別研究の成果と課題を踏まえ、今年度の取り組みでは「日常の教育活動と結び付ける視点の共有」「授業づくりの視点を学校全体で共有する意識の向上」「発達段階に応じた系統性を意識した実践」を重視した。その中で、端末活用場面で求められる資質・能力を明確化し、それに対応する働きかけを校内で共有したことにより、日常の教育活動の中で「ICTの善き使い手」を育成するための指導の手立てを具体化することができた。

上志比小学校では、日々の端末活用の場面にデジタル・シティズンシップ教育を位置付け、子どもたちに必要な資質・能力を育む働きかけを継続して行うことができたと言える。一方で、生成 AI の急速な進展によって、デジタル技術の変化はこれまで以上に予測が困難になりつつある。そのような中で、デジタル社会を幸せに生きる子どもたちに必要な資質・能力を育成するためには、目の前の子どもたちの実態を見取りながら、「今、何が必要なのか」を柔軟に判断し、その時々合った教育方法を考え、実践していく姿勢が求められる。

本センターでは、この4年間、デジタル・シティズンシップ教育の実践を通して、多くの学校の取組みに伴走してきた。今後はこれまでの実践研究の蓄積を活かして、必要な支援を柔軟に提供していきたい。

最後に、本研究実践のためにご協力いただいた上志比小学校の教職員の皆様に、この場を借りて心より厚く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- (1) 豊福晋平 (2023) 「学校にデジタル・シティズンシップを導入するには」 福井県教育総合研究所「紀要」第 128 号 特別寄稿 2023
- (2) 経済産業省「未来の教室」  
『GIGA スクール時代のテクノロジーとメディア～デジタル・シティズンシップから考える創造活動と学びの社会化』  
[https://steam-library-gov.note.jp/n/11b0a319a6e9c?magazine\\_key=mla76351fdce9](https://steam-library-gov.note.jp/n/11b0a319a6e9c?magazine_key=mla76351fdce9)  
(最終アクセス：2025年12月26日)
- (3) 総務省『家庭で学ぶデジタル・シティズンシップ実践ガイドブック』  
[https://www.soumu.go.jp/use\\_the\\_internet\\_wisely/parent-teacher/digital\\_citizenship/practice/](https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/parent-teacher/digital_citizenship/practice/) (最終アクセス：2026年1月5日)
- (4) 文化庁『はじめて学ぶ著作権』  
[https://pf.bunka.go.jp/chosaku/chosakuken/hakase/hajimete\\_1/index.html](https://pf.bunka.go.jp/chosaku/chosakuken/hakase/hajimete_1/index.html)  
(最終アクセス：2026年2月10日)
- (5) 坂本旬・豊福晋平・今度珠美・林一真・平井聡一郎・芳賀高洋・阿部和広・我妻潤子 (2022)  
『デジタル・シティズンシップ プラスー やってみよう！創ろう！善きデジタル市民への学びー』  
大月書店
- (6) 日本デジタル・シティズンシップ教育研究会 (坂本旬・豊福晋平・芳賀高洋・林一真・谷正友・今度珠美) (2024)  
『はじめよう！デジタル・シティズンシップの授業2 ― 善きデジタル市民となるための学び ―』  
日本標準